

# 中世後期南九州地域の武家権力による対外交流と禅宗寺院 —遣明船・琉球通交を中心として—

兒玉 良平

大阪市立大学大学院 文学研究科 哲学歴史学専攻

日本史学専修 後期博士課程2年生

**Keywords:** 戦国期, 南九州地域, 対外交流, 禅宗寺院, 島津氏

## 1. はじめに

中世後期の、日明通交・日琉通交などの対外交流においては、禅宗寺院や禅僧が大きな役割を果たしていた。例えば、遣明船貿易では禅僧が使節の主力を担い、彼らは外交文書の起草においてもまた、必要な存在であった。また、禅宗寺院自体、遣明船使節などの外交使節の宿舎として機能していた。以上のような対外交流における禅宗寺院・禅僧の役割は、これまで主に畿内や周防国（現・山口県）の大内氏領内を中心に解明されてきた。一方、同時期の南九州地域では、東アジア海域との境界地帯に位置するという地域的特性から、頻繁に対外交流が行われていたと考えられ、南九州地域における対外交流にかかわる研究は極めて多い。しかし、これらの研究では、必ずしも地域内の禅宗寺院や禅僧にスポットを当てた検討がなされているとはいえない。こうした問題意識に基づき、本報告では、16世紀を中心として、南九州地域の禅宗寺院・禅僧の動向を、島津氏一門などの武家権力による対外交流と関連させて検討したい。

## 2. 遣明船派遣と南九州地域の禅宗寺院・武家権力

16世紀初頭の日明貿易においては、大内氏と、室町幕府管領の細川京兆家が、貿易利権をめぐる対立していた。この対立は、後に寧波の乱（大永3、1523年）に発展する。そうした情勢の中で、遣明船の航行ルート上に位置する南九州地域の武家権力は、大内氏・細川京兆家双方との政治的交渉をもつこととなった。薩摩・大隅国（現・鹿児島県）守護であった島津奥州家や、その一門家であった日向国（現・宮崎県）の島津豊州家などは、その典型例である。そして、それらの武家権力の領内の禅宗寺院・禅僧もまた、遣明船派遣をめぐる政治的交渉に関与していたのである。

例えば、寧波の乱の契機となった大永度遣明船の準備段階においては、細川京兆家の派遣する遣明船を、島津豊州家の拠点港であった日向国油津（現・宮崎県日南市）で抑留するように、大内氏が島津豊州家に対して求めている状況下において、「興国寺東堂」という人物が、大内氏と島津奥州家・島津豊州家の仲介を行っていた。興国寺は、島津奥州家の本拠であった鹿児島に所在する曹洞宗寺院であり、島津奥州家菩提寺として強大な影響力を持っていたと考えられる福昌寺末の寺院であった。「興国寺東堂」すなわち鹿児島興国寺の前住職が、遣明船派遣

にかかわる政治工作を行っていたのである。

一方で、島津奥州家・豊州家は、細川京兆家との間でも政治工作を行っており、それにも禅宗寺院・禅僧が関与していた。油津に所在した禅宗寺院である慶雲院・臨江寺には、大永度遣明船細川船正使・鸞岡省佐の師にあたる玉淵瑞杲が滞在し、細川船派遣のための工作を行っていたとみられる。島津奥州家・豊州家は、大内氏・細川京兆家双方に協力し、利益の最大化を図ろうとしたと考えられるが、その中で、領内の禅宗寺院・禅僧を有効に活用したと考えられよう。

### 3. 16世紀後半の対琉球通交と禅宗寺院

16世紀中盤以降、南九州地域の武家権力の勢力図は大きく変動し、守護・島津奥州家の没落と共に、有力な一門家であった島津相州家が台頭し、島津本宗家として南九州地域を統一していく。島津相州家もまた、対外交流の利権を掌握し、積極的に関与していった。当該期以降は、琉球との通交・貿易が、南九州地域における対外交流のメインとなっていく。

それでは、禅宗寺院はどのように関与していたのだろうか。例えば、前述の鹿児島興国寺は、天正3年(1575)に琉球使節が鹿児島を訪れた際、その宿舎として利用されている(『上井覚兼日記』)。遣明船貿易において培われた興国寺の対外的機能が、対琉球通交でも活用されていたと評価できよう。

16世紀末には、島津本宗家(相州家)が豊臣秀吉に降伏し、対琉球通交・貿易利権も、豊臣政権の関与するところとなっていく。同時期に、島津本宗家は通交・貿易の拠点、薩摩国山川(現・鹿児島県指宿市)に集約する動向を見せ始める。その中で、天正20年(1592)に豊臣政権から派遣され薩摩に下向した細川幽斎は、島津領内の寺院から領地を召し上げる政策の実施を試みるが、山川の臨済宗寺院である正龍寺には、「唐船が行き交う港に位置するため」という論理で寺領を安堵した(『薩藩旧記雑録』)。これは、正龍寺が拠点港・山川における外交的機能を期待されたためであろう。実際、元和8年(1622)には、正龍寺の僧が琉球使節となっている(『島津家文書』)。近世初期に至っても、南九州地域の禅宗寺院の対外的機能は、維持されていたのである。

### 4. おわりに

以上のように、南九州地域の禅宗寺院・禅僧も、先行研究で明らかにされた他地域の禅宗寺院・禅僧と同様に、対外交流における政治的交渉を担っていたことが明らかになった。今後は、さらなる事例の蓄積と、個々の禅僧の動向を追究することを課題としたい。

### 参考文献

伊藤幸司 2003 「大内氏の琉球通交」『年報中世史研究』28, 187-210.

福島金治 1998 「唐船造船の場としての日向国と貿易」『宮崎県史 通史編 中世』宮崎県